

# 夢殿

楠山正雄

青空文庫



むかし日本の国に、はじめて仏さまのお教えが、外国から伝わって来た時分のお話でございます。

第三十一代の天子さまを用明天皇と申し上げました。この天皇がまだ皇太子でおいでになった時分、お妃の穴太部の真人の皇女という方が、ある晩御覧になったお夢に、体じゆうからきらきら金色の光を放って、なんともいえない貴い様子をした坊さんが現れて、お妃に向かい、

「わたしは人間の苦しみを救って、この世の中を善くしてやりたいと思つて、はるばる西の方からやって来た者です。しばらくの間あなたのおなかを借りたいと思つて、はるばる

ときました。

お妃はびつくりなすつて、

「そういう貴いお方が、どうしてわたくしのむさくるしいおなかの中などへお入りになれましよう。」

とおつしやいますと、その坊ぼうさんは、

「いや、けつしてその氣きづかいには及およばない。」

と言いうが早はやいか踊おどり上あがって、お妃きさきの思おもわず開あけた口の中へぽんと跳とび込こんでしまつたと思おもうとお夢ゆめはさめました。

目めがさめて後のちお妃きさきは、喉のどの中に何なにか固かたくしこるような、玉たまでもくくんでいるような、妙みょうなお氣き持ちでした、やがてお身み重おもにおなりになりました。

さて翌よくねん年の正しょう月がつ元げん日じつの朝あさ、お妃きさきはいつものように御ご殿てんの中なかを歩あるきながら、お厩うまやの戸とくち口くちまでいらつしやいますと、にわかにお産さん氣けがついて、そこへ安やす々やすと美うつくしい男おとこの御み子こをお生うみおとしになりました。召めし使つかいの女じよ官かんたちは大おおさわぎをして、赤あかさんの皇おう子じを抱だいて御お産さん屋やへお連つれますと、御ご殿てんの中なかは急きゆうに金こん色じきの光ひかりでかつと明あかるくなりました。そして皇おう子じのお体からだからは、それはそれは不思議ふしぎなかんばしい香かおりがふんぷん立たちました。お厩うまやの戸との前まえでお生うまれになつたというので、皇おう子じのお名なを厩うまやとのおうじと申もうし上げました。後のちに皇こう太たい子しにお立たちになつて、聖しょう德とく太たい子しと申もうし上げるのはこの皇おう子じのことでございます。

さて太子はお生まれになつて四月めには、もうずんずんお口をお利きになりました。明さて年の二月十五日は、お釈迦さまのお亡くなりになつた御涅槃の日でしたが、二歳になつたばかりの太子は、かわいらしい両手をお合わせになり、西の方の空に向かつて、

「南無釈迦仏。」

とお唱えになつたので、おつきの人たちはみんなびつくりしてしまいました。

太子が六歳の時でした。はじめて朝鮮の国から、仏さまのお経をたくさん献上してまいりました。するとある日太子は、天子さまのお前へ出て、

「外国からお経がまいつたそうでございます。わたくしに読ませて頂きとうございます。」

とお申し上げになりました。

天皇はびつくりなすつて、

「どうしてお前にお経が分かるだろう。」

とおっしゃいますと、太子は、

「わたくしはむかしシナの南岳なんがくという山に住すんでいて、長年ながねほとけみち仏の道しゆぎようを修行しゆぎよういたしました。こんど日本の国くにに生まうれて来くることになりましたから、むかしの通りとおまたお経きようを讀よんでみたいと思おもいます。」

とお答こたえになりました。

天皇てんのうははじめで、なるほど太子たいしはそういう貴人とうとの生うまれかわりであつたのかとお悟さとりになつて、お経きようを太子たいしに下くださいました。

太子たいしが八歳さいとしの年としでした。新羅しんらの国くにから仏さまのお姿すがたを刻きぎんだ像ぞうを獻けんじよう上ういたしました。その使者ししやたちが旅館りよかんに泊とまつている様子ようすを見みようとお思おもいになつて、太子たいしはわざと貧乏びんぼう人にんの子供こどものようなぼろぼろなお姿すがたで、町まちの子供こどもたちの中ちゆうに交まじつてお行いきになりました。すると新羅しんらの使者ししやの中ちゆうに日羅にちらという貴い坊ぼうさんがおりました。きたない童わらべたちの中ちゆうに太子たいしのおいでになるのを目めざとく見み付けて、

「神かみの子こがおいでになる。」

といつて、太子たいしに近ちかつこうといたしました。太子たいしはびつくりして逃にげて行いこうとなさいました。日羅にちらはあわてて履くつもはかず駆かけ出だしてお後あとを追おいかけました。そして太子たいしの前まえの地じびたにぺったりひぎをついたままうやうやく、

「敬礼救世観世音菩薩。妙教流通東方日本国。」

と申しますと、日羅の体から光明がかつと射しました。そして太子の額からは白光がきらりと射しました。日羅の言つた言葉は、人間の世の苦しみを救つて下さる観世音菩薩に、そしてこの度東の果ての日本の国の王さまに生まれて、仏の教えをひろめて下さるお方に、つつしんでごあいさつを申し上げますという意味でございませう。

大きくおなりになると、太子は日羅の申し上げたように、仏の教えを日本の国中におひろめになりました。はじめ外国の教えだといつてきらつていた者も、太子がねつしんに因果応報ということのわけを説いて、

「人間のいのちは一代だけで終るものではない。前の世とこの世と後の世と、三代もつづいている。だから前の世で悪いことをすれば、この世でその報いがくる。けれどこの世でいいことをしてその罪を償えば、後の世にはきつと幸福が報ってくる。だからだれも仏さまを信じて、この世に生きている間たくさんいいことをしておかなければならない。」

こうおさとしになりますと、みんな涙をこぼして、太子とごいっしょに仏さまをおがみしました。けれど中でわがままな、がんこな人たちがどうしても太子のお諭しに従おうとしないので、お寺を焼いたり、仏像をこわしたり、坊さんや尼さんをぶちたたいてひどいめ

にあわせたり、いろいろな乱暴をはたらきました。太子はその人たちのすることをみて、  
深いため息をおつきになりながら、

「しかたがない、悪魔を滅ぼす剣をつかう時が来た。」

とおつしやつて、弓矢と太刀をお取りになり、身方の軍勢のまつ先に立つて勇ましく  
戦つて、仏さまの敵を残らず攻め滅ぼしておしまひになりました。

こうしてこの太子のお力で、いろいろの邪魔を払つて、仏さまのお教えがずんずんひろ  
まるようになりました。摂津の大坂にある四天王寺、大和の奈良に近い法隆寺などは、  
みな太子のお建てになつた古い古いお寺でございます。

## 三

太子のお徳がだんだん高くなるにつれて、いろいろ不思議な事がありました。ある時甲  
斐の国から四足の白い、真つ黒な小馬を一匹朝廷に献上いたしました。太子はこ  
の馬を御覧になると、たいそうお喜びになつて、

「この馬に乗つて国中を一めぐりして来よう。」

とおつしやつて、調使丸ちようしまるという召使めしつかの小舎人ことねりをくらの後ろうしろに乗のせたまま、馬うまの背せに乗のつて、そのまますうつと空そらの上うへへ飛とんでお行いきになりました。下界げかいでは、

「あれ、あれ。」

といつて騒さわいでいるうちに、太子たいしはもう大和やまとの国くに原はらをはるか後あとに残のこして、信濃しなのの国くにから越こしの国くにへ、越こしの国くにからさらに東ひがしの国くに々々にをすつかりお回まわりになつて、三日みっかの後のちにまた大和やまとへお帰かえりになりました。この時とき太子たいしのお歩あるきになつた馬うまの蹄ひづめの跡あとが、国くに々々にのたか高い山やまに今いまでも残のこつていたのでございます。

またある時とき、太子たいしは天子てんしさまの御前ごぜんで、勝鬘しょうまん経きやうというお経きやうの講こう釈しゃくをおはじめになつて、ちようど三日みっかめにお経きやうがすむと、空そらの上うへから三尺じやくはばも幅はばのあるきれいな蓮花れんげが降ふつて来て、やがて地ちの上に四尺しやくたかも高つちく積つもりました。その蓮花れんげを明あくる朝天子あさてんしさまが御覽ごらんになつて、そこに橘たちばな寺でらというお寺でらをお立たてになりました。

またある時とき、日本にほんの国くにからシナの国くにへ、小野妹子おののいもこという人ひとをお使つかいにやることになりました。その時とき太子たいしは妹子いもこに向むかひ、

「シナの衡山こうざんという山やまの上うへのお寺でらは、むかしわたしが住すんでいた所ところだ。その時とき分ぶんいっしよにいた僧そうたちはたいい死しんだが、まだ三人にんは残のこっているはずだから、そこへ行いつて、

むかしわたしが始終つかつていた法華經の本をさがして持つて来ておくれ。」

とおつしやいました。

妹子はおいしいつけの通り、シナへ渡るときつそく、衡山という所へたずねて行きました。そしてその山の上のお寺へ行くと、門に一人の小坊主が立っていました。妹子がこういふ者だといつて案内をたのみますと、小坊主はもう前から知つていふといつたよ  
うに、

「和尚さん、和尚さん、思禪法師のお使いがおいでになりましたよ。」

といひました。するとお寺の中から腰の曲がつたおじいさんの坊さんが三人、ことごと杖をつきながら、さもうれしそうにやつて来て、太子の御様子をたずねるやら、昔話を  
をするやらしたあとで、妹子のいうままに、一巻の古い法華經を出して渡しました。妹  
子はそれを持つて、日本へ帰つたといふことです。

#### 四

太子のお住まいになつていたお宮は大和の斑鳩といつて、今の法隆寺のある所にあ

りましたが、その母屋おもやのわきに、太子たいしは夢殿ゆめどのという小さいお堂どうをおこしらえになりました。そして一月ひとつきに三度どずつ、お湯ゆに入はいつて体を浄きよめて、そこへお籠こもりになり、仏ほとけの道の修しゆぎ行ぎやうをなさいました。

ある時とき太子たいしはこの夢殿ゆめどのにお籠こもりになつて、七日なつか七夜ななよもまるで外そとへお出でにならないことがありました。いつもは一晚ひとばんぐらいお籠こもりになつても、明日あすの朝あさはきつとお出でましになつて、みんなにいろいろと尊とうといお話はなしをなさるのに、今日きようはどうしたものだろうと思おもつて、お妃きさきはじめおそばの人ひとたちが心しん配ぱいしますと、高麗こまの国くにから来きた恵慈えじという坊ぼうさんが、これは三昧さんまいの定じやうに入いるといつて、一心いっしんに仏ほとけを祈いのつておいでになるのだらうから、おじやまをしないほうがいいといつて止とどめました。

するとちようど八日ようかめの朝あさ、太子たいしは夢殿ゆめどのからお出でましになつて、「先せんだつて小野おの妹子いもこの取とつて来きてくれた法華ほけ経きやうは、衡山こうざんの坊ぼうさんがぼけていたと見みえて、わたしの持もつていたのでないのをまちがえてよこしたから、魂たましいをシナまでやつて取とつて来きたよ。」

とおつしやいました。

その後のちまた小野おの妹子いもこが二度どめにシナへ渡わたつた時とき、衡山こうざんのお寺てらを訪たずねると、前まえにいた三

人の坊さんの二人までは死んでしまつて、一人だけ生き残つておりましたが、その坊さんの話には、

「先年あなたのお国の太子が青い龍の車に乗つて、五百人の家来を従えて、はるばる東の方から雲の上を走つておいでになつて、古い法華経の一卷を取つておいでになりました。」

と言つたそうでございます。

## 五

太子のお妃は膳臣の君といつて、それはたいそう賢くてお美しい方でしたから、御夫婦のお仲もおむつまじうございました。ある時ふと太子はお妃に向かつて、

「お前とは長年いっしょにくらして来たが、お前はただの一言もわたしの言葉に背かなかつた。わたしたちはしあわせであつたと思う。生きているうちそうであつたから、死んでからも同じ日に、同じお墓の中に葬られたいものだ。」

とおつしやいました。お妃は涙をお流しになりながら、

「どうしてそんな悲しいことをおつしやるのでございますか。このさき百年も千年も生き  
 ている、おそばに仕えたいと、わたくしは思っているのでございますのに。」

とおつしやいました。けれども太子は首をおふりになつて、

「いやいや、初めがあれば終りのあるものだ。生まれたものは必ず死ぬに極まつたものだ。  
 これは人間の定まつた道でしかたがない。わたしもこれまでいろいろのものに姿をかえ、  
 度々人間の世に生まれ変わつて来て、仏の道をひろめた。とうとうおしまいにこの日  
 本国の皇子に生まれて来て、仏の道の跡方もない所に法華の種を蒔いた。わたしの仕  
 事もこれで出来上がったのだから、この上永く、むさくるしい人間の世の中に住んでい  
 ようとは思わない。」

としみじみとお話をなさいました。お妃はなおなお悲しくおなりになつて、とめ度なく  
 涙がこぼれて来ました。

ちようどそのころでした。太子は摂津の国の難波のお宮へおいでになつて、それから大  
 和の京へお帰りになるので、黒馬に乗つて片岡山という所までおいでになりますと、  
 山の陰に一人物も食べないとみえて、見るかげもなく、痩せ衰えたこじきが、虫のように  
 寝ていました。お供の人たちは、太子のお馬先に見苦しいと思つて、あわてて追いたて

ようとしますと、太子はやさしくお止めになつて、食べ物をおやりになり、情けぶかいお言葉をおかけになりました。そして帰りしなに、

「寒いだろうから、これをお着。」

とおつしやつて、召していた紫色の御袍をぬいで、お手ずからこじきの体にかけておやりになりました。その時、

「しなてるや

かたおかやま  
片岡山に

飯に飢えて

ふ  
臥せる旅びと

あわれ親無し。」

という和歌をお詠みになりました。

「しなてるや」というのは、片岡山という言葉に冠せた飾りの枕言葉で、歌の意味は、片岡山の上に御飯も食わずに飢えて寝ている旅の男があるが、かわいそうに、親も兄弟もない、かなしい身の上なのであろうかというのです。

するとその時、寝ていたこじきが、むくむくと頭をあげて、

「斑鳩や

富の小川の

絶えばこそ

我が大君の

御名を忘れぬ。」

と御返歌を申し上げたといひます。

歌の中にある「斑鳩」だの、「富の小川」だのというのは、いずれも太子のお住まい

になつていた大和の国の奈良に近い所の名で、その富の小川の流れの絶えてしまうことは

あろうとも、太子さまの今日のお情けをけつして忘れる時はございませぬといふのでござ

います。

さて太子は奈良の京へお帰りになりましたが、その後で片岡山のこじきは、とうとう

死んでしまいました。太子はそれをお聞きになつて、たいそうお嘆きになり、手あつく葬

つておやりになりました。それを聞いた七人の大臣が、太子さまともあるものがそんな

軽々しい事をなさるとはといつて、やかましく小言を申しました。太子はその話をお聞

きになると、七人の大臣を呼び出して、

「お前たちはそんなむずかしいことをいつていないで、まあ片岡山へ行つてごらん。」とおっしゃいました。

大臣たちはぶつぶつ言いながら、ともかくも片岡山へ行つてみますと、どうでしょう、こじきのなきがらを取めた棺の中は、いつか空になつていて、中からはぷんとかんばしい香りが立ちました。大臣たちはみんな驚いて、太子も、このこじきも、みんなただの人ではない、慈悲の功德を世の中の人たちにあまねく知らせるために、尊い菩薩たちがかりにお姿をあらわしたものだろうと思うようになりました。

## 六

さてこのことがあつてから後間もなく、太子はある日お妃に向かい、「いよいよ、いつぞやの約束を果たす日が来た。わたしたちは今夜限りこの世を去ろうと思う。」

とお言いになりました。

そして太子とお妃とはその日お湯を召し、新しい白衣にお着替えになつて、お二人で

夢殿にお入りになりました。

明くる日の朝、いつまでもお二人ともお目ざめにならないので、おそばの人たちが不思議に思つて、そつと御堂の中に入つてみますと、お二人はまくらを並べたまま、それはそれは安らかに、まるでいつもやすやすやお休みになつていような御様子で、息を引き取つておいでになりました。お体からはぷんと高く、かんばしいにおいが立ちました。太子のお年は、四十九歳でございました。

太子のおかくれになつた日、シナの衡山からとつておいでになつた古い法華経も、ふと見えなくなりました。それもいっしょに持つておいでになつたのだろうということです。



# 青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夢殿

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>